掲載許可番号：d20241107-04

個々の成長に応じた乳幼児保育の重要性などを説明した松山東雲短大の岡田恵准教授
＝６日午後、八幡浜市北浜１丁目

乳幼児の誤嚥 要因考察

八幡浜

新居浜の事故受け研修会

新居浜市の保育園で昨年、生後8カ月の男児が給食中にのどを詰まらせ重体となった事故を受け、再発防止を考える研修会が6日、八幡浜市北浜1丁目の県八幡浜支局であった。南予の保育士や幼稚園教諭ら約１００人が事故の要因や、心肺蘇生法など緊急時の対応を学んだ。

事故を巡り新居浜市の第三者委員会で委員長を務めた松山東雲短大の岡田恵准教授が、市に提出した報告書を基に乳幼児を取り巻く状況を解説した。

岡田准教授は、２０１４年からの6年間で食品を誤嚥（ごえん）し窒息して死亡した14歳以下は80人で、うち0歳は26人と「最も割合が高い」と指摘。「0～2歳は心と体が成長する重要な時期」として、新入園児の離乳食に関する情報共有の徹底など、個々の成長に応じた乳幼児保育の重要性を説いた。

参加者は乳幼児が食べ物などを喉に詰まらせた場合の対応法を実践。八幡浜地区消防本部職員の説明を受けながら、うつぶせにした人形を太ももに乗せ、肩甲骨の中間を力強くたたく「背部叩打（こうだ）法」などに取り組んだ。

第三者委の報告書によると、男児は刻んだ生のリンゴで窒息した可能性が高く、離乳食の提供方法や誤嚥リスクの認識不足など複数の問題点があった。

研修会は県が主催し、本年度中に中予と東予でも開く予定。

（秋山雄作）